

大学地域連携における人間学的な行為理解の基礎 — ボイテンディク思想を手掛かりに—

青山清英¹⁾・鈴木 理¹⁾・土屋弥生¹⁾・伊佐野龍司¹⁾・関慶太郎¹⁾

Foundation of Anthropological Understanding of Action in Community-University Partnership —Taking a cue from Buytendijk's thought—

Kiyohide Aoyama¹⁾, Osamu Suzuki¹⁾, Yayoi Tsuchiya¹⁾,
Ryoji Isano¹⁾ and Keitaro Seki¹⁾

I. はじめに

「学生たちが校庭で小学生にボールゲームを教えている。小学生たちはキャーキャーと歓声をあげながら一心不乱にボールを追いかけている。ひとりの子どもが転んでしまい、顔をしかめている。学生のひとりがその子に駆け寄り声をかける。子どもはにっこりと笑い、「大丈夫」と答えている。その様子を学生の指導教員は心配そうに見つめながら他の子たちと一緒に遊ばない子の相手をしている。子どもに声をかけた学生は行事の係の保護者のもとに行き、消毒液が無いかを尋ねている。子どもは「大丈夫!」と叫んで、ほかの子と走っていく。・・・」 「近くの大学の学生が介護施設にボランティアでやってきた。学生は入居者の車いすを押しながら一生懸命に入居者に話しかけている。しかし、入居者の表情は無表情のまま遠くをみている。学生はげげんそうな顔をしながら、ヘルパーさんに何かを尋ねている。・・・」これはありふれた学生の地域活動の様子であるが、現在このような大学と地域の連携活動はさまざまなかたちで行われている。

中塚・小田切 (2016) は、大学と地域の連携について大学や学生の視点から考えた場合、地域連

携の実践活動や研究活動においては、地域の人々が、自ら課題解決・価値創造する力をつけながら、地域のコミュニティが本来の力を回復・強化し、地域の人々に夢や希望を与えることに、どのように貢献しているか、いわゆる「エンパワーメント」を重視することが重要であるとしている。そのためには大学と地域の連携において各参加者が何を学んでいくのかといったことに自覚的に向き合う必要があるであろう。大学と地域の連携活動は、個人的な活動、グループによる組織的活動、地域化された活動といったように重層的に考えられなければならないし、各層においてさまざまな研究領域が関与し、活動や組織あるいは政策などについてさまざまな研究方法を用いて検討されることが求められる。

たとえば、大学地域連携に対しても行われている「政策研究」では「政治学」(68%)、「経済学・経営学」(7%)、「社会学・ソーシャルワーク」(5%)などの研究者によって、政治学では対外政策、防衛・軍事政策などが、経済学・経営学では健康、経済規制、エネルギー問題などが、社会学では健康、貧困・福祉、ヒューマン・サービスなどが研究対象として高い比率を示している。さらにこれらのテーマについてどのような研究方

1) 日本大学文理学部

1) College of Humanities and Sciences, Nihon University

法を用いてアプローチしているかみてみると、主な結果は「経験的調査法」(24%)、「モデル構成・最適化・演繹的方法」(4%)、「システム分析」(2%)となっている。そしてこれらの分析では、統計学的手法だけではなく情報工学の手法をも用いた定量的分析や規範的分析が主に用いられている(山川, 1983)。したがって、これらの研究で規範的・実証的な合理的モデルの解明が中心となる。これについて現象学的社会学者のシュッツは、このようにして解明されるモデルは確かに合理的モデルではあるが、生身の人間が定義した状況で行っている行為モデルではなく、研究者によって構成された類型が研究者によって設定された人工的環境で行うものとしての、架空の行為者によって行われるモデルであることに注意しなければならないという(シュッツ, 1980, pp.305-306)。さらにシュッツは次のように述べている。「社会科学のきわめて多くの領域において、社会学者は個々の行為者に生じるあらゆる事柄に関わりなく正しく研究を行うことができるし、事実行われてきた。だが、こうした一般化や理念化という高い抽象レベルでの作業とは、どのような場合にも、学問上のある種の便法に他ならない。研究している問題が要求する場合には、社会学者はいつでも研究のレベルを個々の人間行動のレベルに移さねばならないし、また真の科学研究がなされている限り、こうした移行は常に可能なものである。」(シュッツ, 1980, p.306)「したがって、社会学者は当の現象を引き起こした個々の行為者の心の中で何が生じたのかを尋ねなければならない。少なくとも、彼は常にそれを問い得る状態にいななければならない」(シュッツ, 1980, p.307)。このようにしてシュッツは、ウェーバーの人間の行為の科学としての「理解社会学」を批判的に受け継ぎ、行為者の「主観的意味」から社会現象を理解しようとする科学の根拠づけの問題を、フッサール現象学によるア・プリアリな構成分析によって基礎づけることを目指すことになる。ここにおいて、ウェーバーの「理解社会学」はシュッツを介してフッサールの現象学と出会うことになる。これはまた、行為者個人の探求となるが故に、われわれに人間という存在の探求を

めざす人間学の視点の導入が地域連携における活動理解と学びの研究に含まれることを意味する。したがって、前述したような学生の地域における日常的な活動を対象とする大学地域連携の研究はここを出発点とする。

Ⅱ. ボイテンディクの間人学的な思想

1. 人間学とは何か

一般的に言って人間学というのは人間の全体についての理論的省察と解することができるが、この省察をどのような観点から行うかということによって人間学の特徴が示されることになる。現代において哲学的な人間学が独立した学問として成立するのは、1928年にシェラーが『宇宙における人間の地位』を世に問うたことに始まるという(金子, 2022, p.4)。その後の哲学的な展開としてはカッシーラの「文化的人間学」、プレスナーの「哲学的人間学」、メルロ＝ポンティの「現象学的人間学」などが成立していくことになる。また、異分野、特に生物学や医学との関係では、ポルトマンの「人間生物学」、ボイテンディクの「生物学的人間学」、ビンスワンガーやヴァイツゼッカーの「医学的人間学」などが陸続と誕生することになる(金子, 2022, pp.23-80)。

このようなさまざまな立場の人間学をみても、本論の主題である大学地域連携活動とその学びを前述した行為者個人において探求するという目的においては、『人間の姿勢と運動に関する一般理論』(1956)や『人間と動物』(1958)、『人間学的生理学序説』(1967)などにおいて、人間と動物の比較研究から人間の行為の解明をめざしたオランダのボイテンディクに思想に注目する必要があるだろう。ボイテンディクの研究歴等についてはすでに『人間と動物』を翻訳した浜中淑彦の解説などがあるので、そちらを参照してもらいたい。以下ではボイテンディクに思想について、本研究の目的との関連で人間の行為の特徴を中心に概観していきたい。

2. ボイテンディクの研究姿勢

ボイテンディクはオランダの生理学者、心理学者であるが、浜中淑彦が『人間と動物』の「訳者

あとがき」で述べているように、その業績は狭義の生理学や心理学に限られておらず、理論生物学や社会学、哲学との境界領域などきわめて広範囲にその射程を収めている。そして彼の生理学や心理学における研究成果は、いわゆる実験を基盤とする純粋な自然科学と異なり、いずれの研究においても「現象学的人間学」の考え方によって貫かれている。この立場からポイテンディクは、社会をも含めて一切の生命現象を物的側面だけに囚われることなく包括的・統合的に理解しようとしているという。人間の行動の研究について、精神医学などの分野においては行動科学的接近ということが求められ、神経心理学的な実証研究が重要視されている風潮にあるが、ポイテンディクの間人学の特徴は現象学的人間学を支柱としながらも、自然科学的実証的研究を無視せずむしろそれを統合的に捉えていこうという視点をもっている。このような視点は、大学地域連携活動に関わるさまざまな人々の行為の理解や学びの解明において極めて示唆的である。

3. 人間的なるものの行為

1) 過程と機能

ポイテンディクはその著『人間の姿勢と運動に関する一般理論』（以下、『一般理論』）のなかのA章の序論で、人間の行為を「統一された方法の視点から、どのように捉えればよいのだろうか」（Buytendijk, 1956, S.1）という問題意識のもと、それは医学あるいは生理学や心理学とどのような関係にあるのだろうか、と問うている。そこで彼はまず、科学論的な観点から人間の行為の考察方法について「過程」と「機能」というふたつの概念を提示し検討している。

ポイテンディクは、人間の行為を「過程」として捉えた場合、それは時間のなかで経過する変化、一瞬、一瞬経過する状態の変化が主題化され、行為は時間における一連の個々の契機として因果的に結びついている事象として究明される（Buytendijk, 1956, S.7）という。このような過程の考察方法には、次のような特徴がある（Buytendijk, 1956, S.7-8）。

①時間のあらゆる瞬間はすべて同じ価値をもっている（等質時間）。

②いわゆる静止局面としての先行する状態と後続する状態は、もっぱら時間のなかで展開しつつある経過の区切りを示している（絶縁化）。

③客観的に計測可能な時間と同時に観察された変化は細分化可能である（細分化可能性）。

このような行為の理解は、当然人間の介入とは無関係に行われていることとして理解される。したがって、行為を観察した人間が知覚することは、この意味において客観的である。そしてこれに基づく行為の説明は因果論的なものとなっていく（Buytendijk, 1956, S.8）。つまり、人間の行為は機械の運動と同様に「ものの運動」として扱われるのである。

これに対して人間の行為を「機能」として把握する場合には、行為における変化は「これがどのように行われたかが問われるのではなく、起こったこと、行われたことが問われる。すなわち、この種の疑問を合理的な仕方では提起できることは、最終状態が最初の状態とは違うだけではなく、別の意味を持つことが確信できる場合だけ」（Buytendijk, 1956, S.7）ということになる。そして、その行為が「意味を持つのは、価値として、価値系として有効な何か別のことに関係させられる場合だけである。」（Buytendijk, 1956, S.7）ここで注意を促したいのは、この機能概念を工学的な物理的観点のそれと混同してはならないということである。たしかに人間の行為を生物学的にとらえた場合、生物学の本来的課題は、現象の因果的説明をすることにあるので、物理学の方法論的立場を堅持したうえで、一種の物理・科学的機械の「過程」として探求することが求められる。しかし、生き物と異なり「機械はく本当>は何もしない。何かが起こるだけである。」（Buytendijk, 1956, S.8）

ポイテンディクは生物学は、物理学とは全く別の道を進むべきであるという。生物学は経験のエビデンスを否定しては、動物の個体および人間の存在を把握することはできない。動物と環境の関係は決して過程として現れるのではなく、常に意味として何か別のものとの関係する現象として、つまり行動の「仕方」としてのみ明らかになる（Buytendijk, 1956, S.12）という。このように動物

の行為は一義的な内的・外的状況との関係によって意味をもつが、人間の場合はそれだけでなく「しなければならない」と「しうる」という意味系と「したい」「してもよい」「すべきである」という価値系のなかで行為が選択される (Buytendijk, 1957, S.178)。このような人間の行為は、サイバネティクスの研究者たちが考えているように、人間や動物の行為を複数のプログラムの階層システムと見なすことはできない。なぜならば、逃走、防御、注意を向けるといったひとつの行為計画でさえも、はじめは不確かな、あるいはさしあたりこうだと決められただけの、しかも「両義性」に特徴づけられた情報に基づいて実行される (Buytendijk, 1967, S.201)。人間の知覚では、ひとつの言葉が音であると同時に意味をもつように、この「両義性」(多様性)は直接与えられている。そこには、しかしかでありかつしかじかではないというもの、そうでありかつそうでないものということが同時に存在し、同時に受動性でもあるような能動性というものが存在する (Buytendijk, 1957, S.178)。ここで注意しなければならないことは、このような人間の行為における生命的・主体的・身体的な「意図」(Vorsatz)を、決して意識的に理解された自我による心理学的な意図 (Absicht) と理解してはならないということである。

ポイテンディクが指摘するように (Buytendijk, 1956, S.13)、人間が行為する場合に意識的に体験することは、たとえ不完全であっても心理学で研究することができるが、動物が跳ぶ、掴むまたは探す場合に体験することをわれわれは知ることができない。しかし、動物および人間の行為を機能として理解しようとする場合、われわれは心理学的な知識を必要としない。行為が関係づけられている状況および関係自体をわれわれは直接の観察から知り、人間および動物の生活の一般的に有効な特徴に基づいて理解するからである。このような経験から直接に与えられた世界内存在は、個体と生活の場の関係に起因する行為の機能的内容をわれわれに伝えることになる。人間および動物の存在の仕方の本質を知ること、行為の存在の本質を生物学的・心理学的・社会学的現象の知見と

ともに包括的に掘り下げることで、行為の機能的特徴についての理解も増すことになる。

2) 原因と動因

前述したように、動物や人間は自分自身の行為や状況に意味を付与することではじめて何かをなすことができる。人間の場合には、動物の意味系だけではなく価値系にも関わりながら、決定と承認を通して行為が決断される。ポイテンディクによれば、このような行為がなぜ選択され、他の行為が選択されなかったのか、という問いは決して原因への問いではなく、動因、動機に関する問いであるという (ポイテンディク, 1995, p.47)。原因とはある状態、たとえば運動の十分な根拠である力、エネルギーといったものなしには考えられない変化である。これに対して動因とは、量的にではなく質的に働く先行者であり、動因はそれがもつ意味を通じて働くものであるという。動因にもたしかに強弱があるが、その相違はエネルギーの大小ではなくて意味の違いに関係している。人間の行為の動機には、はっきりと認められるものと、漫然として捉えがたい、もしくは隠されているものがある。自分自身の動因についても、本人に気づかれぬまま終わってしまうこともある (ポイテンディク, 1995, p.48)。このような動因に関連して現象学者のフッサールは、「動機づけ」とは精神を統制している規則であり、物質的な自然を支配している因果性から区別されるものであり、「自我動機づけ」と「連合的動機づけ」に区別できるという。前者は現実的な対象の定立をするように自我を動機づけるものであり、後者は自我の関与なしに生じる感覚の発生のような任意の種類を動機づけるものである (フッサール, 2009, pp.211-275)。いずれも主観を動かして目標に向かわせる心的プロセスという意味には収まらない、あらゆるものが現在の状況を補完するように動機づけられるものである。このような意味での動機づけを考える場合、どうしても考えておかねばならないのが、ポイテンディクの「出会い」概念である。

3) 出会いとしての行為

人間の社会では、意図的にせよ偶然的にせよ、毎日じつに多くの種類の出会いが生じている。したがって、出会いの研究は、実に多くの対象を持つことになる。この時、ポイテンディクが言うように、必要なことは実証的研究者の視点と見方を放棄することである。出会いと呼ばれるできごとを客観的に知覚される世界の一コマとしてはならない。フッサールのいう「無関心な傍観者」の態度で眺めれば描写しうるようなものではないのである。出会いとは各個人にとって意味のある状況のなかでの個人間のコミュニケーションをさしているのだから（シュトラッサー、1978）。したがって、われわれは様々な出会いにおいて人格的、共感的に他者と関わることが求められることになる。このようなことから、出会いの研究はふたつの特徴をもつことになる（ポイテンディク、1966）。第一に、人間が世界および他者と関係を持つに至る様々な様相を経験的に知ること、すなわち自己に与えられた状況を発見し、有意義な投企をつくりあげ、自己の本性と自己の自由との間の緊張のなかでその投企による様々な様相を経験的に知ること。第二に、出会いの諸様相に関する認識は、常に人間存在に対する理解によって導かれなくてはならず、この理解は絶えず新たな「直観的認識」に先導されることになる（ポイテンディク、1966）ということである。ここにおいてわれわれは、直観される人間の行為について確認することが求められることになる。この直観される人間の行為の考察にあたっては、ポイテンディクの「自己運動」と「主体性」という概念を確認しておく必要がある。ポイテンディクは生命ある者と生命なきものとの本質的差異は自己運動にあるという。この人間の運動行為の固有性を確認しておきたい。

4) 自己運動、主体性、身体性

まずポイテンディクはフランスのミシュットの心理学的な知覚実験を例としてとりあげ自己運動について考える。白い布の上に投影された黒点のかたちを変化させていくと、一定の条件下ではこの黒点に外から惹起されて生じる運動ではなく、

自発的な自己から生じるかのように思われる自己運動が生じるという（Buytendijk, 1956, S.21）。また植物は見た目には自ら動いていうようには見えないかもしれないが、植物の生長を撮影した動画を高速再生すれば、そこに自己運動を観察することができる（Buytendijk, 1956, S.21）。しかし、ポイテンディクはこのような自己運動を自己・運動と呼び動物や人間の運動行為と区別する。ポイテンディクによれば植物は「境界」（Grenz）をもつ存在だという。この境界は、内的な物理的・科学的過程によってその位置が変えられる特徴をもち、これに対して動物の自己運動は、変化のなかでの「自己恒常性」を特徴とし、境界によって制限されているのではなく、境界を「もっている」のであり、自らの存在を境界のところで実現するという存在なのである（Buytendijk, 1956, S.22）。つまり、動物は境界に閉じ込められているのではなく、境界に規定されつつその境界を自由に処理するのである。したがって、動物の運動行為には状況との内在的関係が洞察されることになる。当然このことは人間においても同様である。動物も人間も感覚をもって自ら動くところに「自発的に生じ、独立的で自律的な自己-自身-からの存在」（Buytendijk, 1956, S.22）を表示する。たしかに自己・運動は「自発的に生じ、独立的で自律的な自己-自身-からの存在」を示す印象をわれわれに与えるように思われる（Buytendijk, 1956, S.22）が、通常、動物や人間が動いている時には、それがどのような運動なのかを理解する場合、状況との関わりが考慮されなければならない。走っているのか、逃げているのか、というように。ここに自己運動の奇妙さがある。それゆえわれわれが自己運動を直観する場合、ものの運動とは異なり、そこに運動当体の外界との関わり、志向性のうちに主体が立ち現れてくることを意味している。つまり、自己運動を直観するとき、われわれは自己運動の自己を主体として了解している。ポイテンディクが「直観される主体性」（Buytendijk, 1956, S.24）という場合、このことが意味されている。このように自己運動の直観的了解において機能的な志向性を発生させるような主体性に注目することによって始めて、自

己運動の認識が自-他との出会いによる関係領域における人間の行為として開示されることになる。したがって、ボイテンディクの主体概念は、人間や動物が外界と織りなす関係領野を開示する案内役としての根本カテゴリーといえるだろう。そしてボイテンディクは、この主体とは何かを知覚し、行うあるいは表現するものであるという (Buytendijk, 1956, S.24)。そして「われわれにとって理解可能な意味に対する感受性の根拠として、またそのような意味を構成しそれに対して有意義に応える活動の根拠として、直観のうちに与えられる存在様式なのである。」(ボイテンディク, 1995, p.36) としている。したがって、自己運動と自己・運動の存在論的差異は明確であろう。

ここで留意しておきたいのは、先に見たボイテンディクの黒点の運動が生きものの自己運動ではなく自己・運動だということが理性的に分かっていたとしても、そこに自己運動を直観してしまうという事態である。加藤 (1983) が指摘しているように、この事実は思惟の産物ではなく、理性的な対象措定的意識により構成されたことでもない。それが生きもののように「思われてしまう」のだから、論理的説明が困難な次元を示しているといえよう。このことが自己運動の把握における直観の必要性を示している。さらに加藤はハイデガーを引きながら、自己運動には無自覚な何ものかの働きがあり、しかもその働きは了解的な働きとしてわれわれに自己運動の直観を構成しているという (加藤, 1983)。この点について主体としての自己運動が直観のうちに与えられる存在様式であるという観点をふまえると、われわれは医学的人間学のヴァイツゼッカーの「根拠関係」についてふれておかなければならない。

ヴァイツゼッカーの根拠関係は晦渋である。ヴァイツゼッカーは根拠関係について次のように説明している。「さてこの生物学のおよび物理学的という二種類の直観の相違は、運動の現象だけではなく生成Werden一般にあてはまる。生物学的運動がその本質上位置の移動としてではなく自己運動として現出するのと同様に、生物学的生成一般も原因と結果の一貫性としてではなく、自発

的生起として現出する。赤ん坊が生れ、生命が消え、鳥が舞い上り、獲物を目指して襲い掛かり、人が目覚め、病気に罹る。物理学は、その研究において認識自我がそれからは独立した対象としての世界に対置されているものと前提している。生物学の経験するのは、生きものがその中に身を置いている規定の根拠それ自体は対象となりえないということである。このことを生物学における「根拠関係」Grundverhältnisと呼ぼうと思う。生物学を支配する根拠関係とは実は客観化不可能な根拠への関わり合いであって、因果論にみられるような原因と結果のごとき認識可能な事物の関係ではない。つまり、根拠関係とは実は主体性のことであって、これは一定の具体的かつ直観的な仕方を経験されるものである。われわれの研究はこの根拠関係の中で行われなくてはならないけれども、これをあからさまに認識することはできない。なぜならばそれは窮極的な審判者die letzte Instanzだからである。これは一つの勢力であり、[それへの] 属域は [それからの] の自由として経験されうるものである。この従属と自由の両者は見間違えるほどよく似たものとして経験されるから、われわれは両者を包括するような一つの表現によってこれを捉えようと思う。もちろんそれによってわれわれは、表現可能性そのもののぎりぎりの限界に達することになる。」(ヴァイツゼッカー, 1975, p.298) つまり、自己運動が主体性であるという事実が、根拠関係の次元にあるということであり、そのことが人間の行為の直観による把握を求めるのである。

ここまで人間の行為の研究における自己運動の概念の理解と主体性の導入の必要性について見てきたが、最後にボイテンディクの「身体性」について確認しておきたい。なぜならば、生理学や心理学をも含めた人間の行為に関する研究は、自己運動、主体性、身体性といった概念を考察の中心に位置づけることによって、より上位の考察法の個々の研究視点をもたらすからである (Buytendijk, 1956, S.30)。

ボイテンディクはその著『人間学的生理学のプロレゴメナ』のなかで人間の身体性について以下の四つの視点をあげている (Buytendijk, 1967, S.53)。

- ①機械的身体性の相、これは生理学の対象となるような身体を指し、物質としての組成や形状からその機能が因果的に導きだされることになる。
- ②身体発生相、これは器官の構造から理解できる機能と自身を自動的に体制化する調整（自律的、自動的に形態を生み出すこと、無意識にある形態が発生すること）を見出す作用、身体のある目的に向かう主題的統一を実現する身体（身体発生）の相。
- ③パトスの調律による身体性の相、世界内存在としての実存は、人格的に体験される気分と共に発生し、変化する身体性の機能的自己体制化によって現れる。
- ④能動的に自分自身を使いこなせる身体性の相、目的（主題）に沿った身体発生を使いこなす身体相。

このようにポイテンディク（Buytendijk）の身体性概念は、それを考察する立場、視点によって異なってくる。しかし、この四つの階層はそれぞれが独立して存在するものではなく絡み合いの構造をもっている。ポイテンディクは行為の志向性を身体において作動する身体的志向性（受動的志向性）と能動的に意志する人格的主体性（能動的志向性）にわけて考えている（Buytendijk, 1967, p.59）。人間学的な意味での人間の行為は、主に1から1の相の観点から主題化することが可能となる。このうち1と1では受動的綜合が、1では能動的綜合が焦点化されることになるであろう。

これまでに確認してきた自己運動、主体性、身体性を中心に位置づけた人間の行為の考察によって、過程分析における形式知との協力が豊かな成果を導き出すことになる。

5) 行為における価値意識

さらにポイテンディクはこれまで述べてきたような意味での人間の行為について「達成性」という観点から検討している。先にも述べたように、生物の行為は、刺激と反応の因果関係に基づいて生じるのではなく、主体のパトスの決定を通して実現される。動物の行動は意味系との関係によって意味を持つのに対して、人間の行動は「した

い」「してもよい」「すべきである」といった価値系の緊張のなかで選択され実現する。すなわち、人間の行動は経験と決断に付随する価値的性格のうちに作り出される「達成」なのである（ポイテンディク, 1995, p.79）。

人間の行為も確かにさしあたり動物の行為と同様にさまざまな状況に関係してはいるが、同時にまた価値系とも関りをもっている。われわれは人間が何気なく習慣的に行った行為をも含めて、自己の行為に意味を見出すだけでなく、同時にまた正しい行為、誤った行為として体験する。このような行為における価値意識は、内含的で感情に即したものであって、明示的に言葉などで表現し得るのはごく稀な場合にすぎない（ポイテンディク, 1995, p.79）。しかし、ポイテンディクは人間の行為が、さまざまな価値によって秩序づけられることこそ、行為達成の内に自己実現するという人間の「身体的世界内存在」というあり方を規定する（ポイテンディク, 1995, p.81）とし、人間の身体的行為における意味系と価値系の重要性を指摘している。以下では、このような身体的行為における価値意識についてポイテンディク（Buytendijk）の共同研究者であるクリスティアン（Christian, 1948）と題する論文をもとに確認しておきたい。

クリスティアンは同論文のなかで、次のような引き綱によって鐘を鳴らす行為を例にして行為における価値意識の存在を論じている。私の前に鐘の引き綱がある。それは穴を通して天井に通されているので、綱がどこに通じているのか、さらには何のためなのかを私は知らないという前提があるとしよう。私は鐘という対象も、その一部であり手がかりでもある綱も、その動かし方も知らない。だから、鐘が私のために存在するには、私がそれを動かしはじめ、引き綱を特定の方法で動かさなければならない（Christian, 1948, S.21）。このとき綱を無茶に強く引くことや無秩序な扱いは何も生み出さない。適切な綱の運用とは、動かす力と増幅された力の相互作用である。まさに動かし方の規則は、この綱の引き方が有効であった限りにおいて、得られた結果から初めて明白に理解可能となり、また規定可能となるのである。この

ような行為の結果は、ある特定の様相や形式として、行為の経過全体に前もって与えられていることはあり得ない。綱を引くときのさまざまな力は、綱を把握して初めて発生し、条件は次々を変化し、作業と共に変化する。要するに、綱の引き方は周界過程との対峙において初めて形成されるのであり、それは決して前もってそこにあるのではなく、発生するのである。このようにわれわれは、実行された結果からのみ、引き方が正しかった、あるいは客観的な振動に適応したといったことをその都度理解することが可能となる (Christian, 1948, S.22)。だからわれわれは行為について語るときにいつも「適合してしまっていること」だけが語られて、「適合すること」が語られないことに注意しなければならない。つまり、行為することは行為の結果と同じ論理系列において規定することはできないのである。すなわち、行為の意図は行為に取り掛かってみて初めて、何らかの規則が明らかになり、その内容が明確にされる前にその経験が「正しい」とか「間違っている」とか「良い」とか「悪い」といったことが初めから明確に現れる。クリスティアンはこれを「行為における価値意識」と呼んでいる (Christian, 1948, S.23)。人間の行為はこの「価値意識」に導かれて発生していく。このことが先述した人間の行為が意味系だけでなく、価値系にも関与しているということを示しているのである。

行為の無意識的な実施では、さらに発見がなされ即興が行われる。しかしこの全ては空時的秩序と価値の秩序のなかにあり、あらゆる自発的な行為は状況に規制され、また同時に「探索的に」即興で形づくられる。身体発生は決定されているのではなくて、ある程度可能性の余地が開かれている (Buytendijk, 1967, S.193)。

4. 「運動モルフォロジー」の方法

これまで述べてきたように、人間の行為は意味系と価値系に関わりながら発生する。そしてその行為はそのただ中において次第に明確となる意図 (Vorsatz) によって規定されながら身体発生する。それでは次にこの身体発生をわれわれはどのようにして把握することができるのか、について

みていきたい。

ボイテンディクは自身の人間学的な研究方法について明確には示していないが、その手掛かりは『一般理論』のいくつかの個所で確認することができる。

まずボイテンディクは分析対象としての人間の行為を次のように考える。「運動に関する学というものは、運動がゲシュタルトの意味でかたちづくられた統一として生じ、すべての生命をもった形式とまったく同様に、分化、全体の部分に対する関係、形態類縁性、形態発生といったゲシュタルト特性に基づいて研究されなければならない、といったことが見抜かれた場合に可能となる。・・・(中略)・・・その対象は、たとえメロディーのように束の間に過ぎ去ってしなうとしても、かたちづくられた運動実行であり、それは直観の中で直接提示され、その構造特性に基づいて研究されるべきである。この種の研究は、基本的には概念的因果的分析とは異なるものである」 (Buytendijk, 1956, S.41) としている。

さらに「われわれは客観的な展開として知覚され、記述できる運動から、遂行の「仕方」を「直接」とらえることができ、それらはいくつかの量的に変化する特性によって特徴づけられるだけでなく、さらにその質的な形式にも従って特徴づけられる。・・・(中略)・・・この運動の遂行の仕方を記述しようとする場合、われわれはいくつかの概念を用いて運動の質的な特性を記述することができる。「素早い」「ゆっくりとした」「弾みのある」「流れるような」「ごつごつした」「リズムカルな」といった概念であり、これらの概念は、直接見たあらゆる運動の特性描写に利用されている。・・・(中略)・・・運動経過に直接見出すことができる特性は、もっぱら時間—空間的な諸関係に関わっているのではなくて、速度や方向変化を引き起こす諸力にも関係している。つまり、運動の変化を引き起こしている原因は、現象からはじめて推論されるというのではなくて、・・・(中略)・・・「直接見る」(Anschauung) ことのなかに直接示されているのである。こうして運動が変化する原因を「直接知覚する」ということでさらに考察するためには、「自己移入」(Einfühlung)

という概念を導入しなければならない。これによってわれわれは、知覚された運動を内的に同時に遂行し (mitvollziehen), 自分のなかにその後の運動展開に必要なインパルスを感じるのである。例えば、スポーツの達成を観客として同時体験していればいるほど、そのスポーツ活動を自分の経験に基づいてよく知っているほど、継起的、同時的な関連のなかで神経刺激インパルスを、さらには状況への諸要求へのインパルスの同調をますます強く「呼び込む」(einfühlen) ことができる。・・・(中略)・・・このように人間は、運動実行の時間-空間的特性を力動的に理解する能力をもっている。従って、「素早い」「流れるような」「ごつごつとした」といった表現は、それらが単に身体部分の位置変化に適用されていたとしても、それ以上に豊かな意味内容というものを獲得することになる。つまり、人間は「何が行われたのか」ということだけでなく、それが「どのように」、そして「なぜ行われたのか」ということも同時に見ている。運動の志向性 (intentionalität) は知覚のなかでもわれわれに示されるのである」(Buytendijk, 1956, S.62)。

このようにポイテンディクの人間の行為の把握の方法をみても、フッサールの本質直観(構造分析)と軌を一にすることは明白であろう。すなわちポイテンディクの運動モルフォロジーの方法とは現象学的行為分析を意味していると解することができるのである。そこで次に、現象学の本質直観について簡単にふれておきたい。

本質直観分析は①自由変更(想像変更)、②先構成(受動的に統一されて何かになる段階)、③能動的観取という三つの手続きから組み立てられている(山口, 2002, p.96以下)。要するに具体的な経験を何もかも媒介せず直接与えられるままに認識すること、すなわち直観することから出発して、受動的意識層や能動的意識層に関して自由変更の操作を通して、様々な条件の変化などによって変わることの無い本質を取り出すことが目指される。ここで注意しておきたいのは、ここでいう「本質」が絶対的唯一のものを意味しているわけではないということである。フッサールが明確に指摘しているように、あらゆる認識や同定

は、たとえそれが外的世界の实在の対象に関するものであっても、対象の「類型」についての、またはそれらが現れる類型的な様式についての一般的な知識に基づいている。厳密に言えば、どのような経験も唯一の独自の経験であり、繰り返し経験される同じ経験でさえ、繰り返されるということにおいて同じではない一回性の出来事である。それは繰り返される同一性であり、異なった文脈、異なった様相において経験される。われわれはかつて経験した類型的な様式の知識に結び付けて、各々の類型的特徴を把握しているのである。これは対象そのもののみならず、対象相互の関係や出来事の相互関係等についてもなりたつものである(シュッツ, 1980, pp.85-88)。

現象学的分析の第二段階は発生的分析である。発生的分析とは、ある行為が生じるには、どのような行為がその前提となっているのかということをも明らかにすることを通じて、当該の行為を構成している行為の発生機序を明らかにすることである。現象学はこの方法を「解体」と呼んでいる。行為を構成している意識の構成層間の依存性や独立性を、すなわち「基づけ関係」を明らかにする(山口, 2002, p.147以下)。現象学的方法では、このふたつの方法を行ったり来たりしながら、その行為を解明していくことが目指される。

加藤(1983)が指摘するように他者の行為の志向性の把握は、このような現象学的方法によって再構成されたものについて処するより他に方法がない。第三者の機能遂行そのものと観察者が内省的に観察したそのものとの関係は対象化することは不可能なのだから直観によるしかないのである。志向性は運動そのものの意図しているものに、そして為されていることに向けられている。この志向性は反省的には意識されず、もっぱら措定的に動機づけられている。厳密な意味では誰も反省しながら何かを為すことはできない。すなわち、その行為の間にまたその行為について反省することはできない(ポイテンディク, 1977, p.234)。直接、身体的にある状況のなかに組み入れられ、状況のなかに入り込むことによるのみ把握できる。先にポイテンディクの直観は反省的思惟とは異なることについて加藤を参照して述べ

ておいたが、人間の思惟の限界として対象化を完全に防ぐことは困難である。したがって、直観によって把握された意味や価値の解明は、非対象的な対象化によってのみ実現不可能である。つまり、ポイテンディクの「生命的想像力」(Buytendijk, 1956, S.154-157)による潜勢運動の働きによってしか把握できないのである。ポイテンディクが「自己移入」について言及するときに、われわれはこの生命的想像力による非対象的対象化が機能していることに留意する必要がある。もちろん、この直観的把握は、観察者の経験の現在値に大きな影響を受けることになる。他者の経験を生きるあるいは追感するということが観察者自身の能力に依存するので、誰もがこの直観による事象の意味や価値の把握を実現できるわけではないということを注意しておきたい。

では次に、このような運動モルフォロジーの方法によって捉えられる本質(類型)についてみていきたい。

5. 人間の行為の類型学

ポイテンディクは『一般理論』のなかで第V章として「人間の運動の類型学」を設けている。そこでポイテンディクは人間の運動の類型的把握、すなわち行為のなかにある価値基準に基づいて、類似した特性をもった行為の形式を把握することについて、「経験内分類」(Buytendijk, 1956, S.62)という考え方を提唱している。

先述したように、ポイテンディクは客観的経過が知覚可能で、説明可能である行為については、実行の仕方を直接把握でき、これは、いくつかの量的に変動する特徴と質的变化、すなわち行為のかたちに現れるという(Buytendijk, 1956, S.60)。これは行為の前後と最中に内観的に生じる体験内容からだけではなく、直接経験可能である「かたちある行為」のプロセスから行為を把握できるということを意味している(Buytendijk, 1956, S.61)。「いくつかの具体的な人間の運動の像がわれわれのそばを通り過ぎるとする。子供あるいは労働者が対象物に手を伸ばす；農夫、少女、兵士の歩行；散歩する人または訓練したアスリートが溝を越えて跳ぶ；さまざまな人達の筆

跡。実行の仕方を描写しようと試みる場合、われわれには、速い、ゆっくり、加速した、遅れた、均等な、不均等な、不安な、不確かな、震える、緊張した、緩んだ、弾力のある、流動する、ぎこちない、リズムカル等の多数の概念があり、これらは観察された全ての運動の特徴付けのために使用できる」(Buytendijk, 1956, S.62)。このような「運動のプロセスで直接見ることができる特徴は時間・空間の関係にだけ関わるのではなく、速度と方向変更に起因する力にも関わることを印象的に教えてくれる」(Buytendijk, 1956, S.62)。「したがって、行われることだけでなく、それがどのように、そして何故行われるかがわかる。運動の志向性は、われわれの知覚にも表れる」(Buytendijk, 1956, S.63)。「その結果、経験内での運動の分類は時間と空間で進行する実行だけでなく、同時にプロセスと行為のかたちを決定する力にも関わることになる」(Buytendijk, 1956, S.63)。

ポイテンディクはその著『女性』のなかで、「かたち」(ゲシュタルト)と「力動性」という運動を特徴づけるふたつの概念を用いて両性の運動について論じている。その分析によれば、男性的な歩行の典型的特徴は「個々の一步一步の終点の強調」にあり、女性的なそれは、男性的な特徴が欠けており、「活動全体の規則的で滑らかな経過」を特徴としている(ポイテンディク, 1977, p.236)という。さらに、それは「流れるような」動きと「角張った」動きというように相反する特徴として把握され、その間には多様な移行的形態があるが、いくつかの段階的まとまりとしての区別が可能である(ポイテンディク, 1977, pp.236-237)という。したがって、人間の行為の意味判断は、類型的に捉えた「典型」を基準に、具体的な行為をこの典型に照らし合わせて行われることになる。

このようなポイテンディクの直観主義的な行為の意味把握は何もポイテンディクだけのものではない。たとえば、フランスの文豪バルザックは、『歩きかたの理論』(1883年)という学術パロディのなかで人間の歩行について、身体のシーニュを通してみた都市の病理をも対象とした興味深い実存分析を展開している。「ここにとりあげ

る歩きかたの理論は、私の見るかぎり、これまでに知られる知識の中でも最も新しい科学であり、これほど興味をそそられるものはない」(バルザック, 1992, p.81) という書き出しではじまるこの学術パロディにおいてバルザックは、当時隆盛を極めていたゲルディやヴェーバー兄弟の歩行、有名なイタリアのボレリの『動物の運動』における定量化による実証主義的運動分析について、私は「読み終えた途端、私はボレリを投げず、ボレリを呪い、老いぼれボレリを軽蔑した。運動ニツイテなど何一つ教えてくれないではないか」(バルザック, 1992, p.102)。「数学のサイン・コサインを束にして集めてみても、直観がわれわれに残してくれた成果にはかないっこない。だから私はその直観だけを頼りに、証明とか世間の評価とは一切気にせず」(バルザック, 1992, p.97-98), 「さまざまな人間現象を観察し、人間の心の底に潜むいかなる感情の襲をも逃がさずとらえ、この特権的な生き物が我あらずと覗かせる意識の片鱗まで究める」(バルザック, 1992, p.108) ことを目指したのである。その結果、バルザックは12の運動公理を明らかにするに至る。そのなかには、人間の行為について「優雅はまるやかな形にあり」といった「優美さ」(バルザック, 1992, p.120) や「われわれの身体はどこもかしこも運動に与っている。どこか一部に運動が偏ってはならない」といった「自然性」(バルザック, 1992, p.121) といったポイテンディクが後に『一般理論』のなかで論じることになる運動特性についても述べられている。また、「歩きかたこそ思想や生活を正確に表す症状」であるという考え方にに基づき、「ぎくしゃくしたせわしない動作は育ちの悪さをうかがわせる」(バルザック, 1992, p.119) というように、都市社会の発達による人間の痛みや進歩が引き起こすひずみを人々の「歩きかた」から鋭く抉り出している。

以上のように確認してきたことから、ポイテンディクの思想は、人間の行為における意味や価値の分析において重要な学的基盤を与えてくれることが明らかにされた。次節ではこれをふまえて、大学地域連携研究における人間学的な学的基盤について見ていきたい。

Ⅲ. 大学地域連携研究の人間学的な理論的基礎 (試論)

1. 大学地域連携活動における意味と価値

加藤 (2019) によれば、大学地域連携に関する研究は、その領域としては「医療・ケア」「教育・学校」「経済・産業」の3分野が中心になっており、研究内容としては①大学による地域連携の全体像を俯瞰したもの、②取組の個別事例について紹介したもの、③大学全体の取組について述べたものなどが多数みられるという。さらに、加藤の指摘にしたがって取り上げられた先行研究を概観してみると、その多くは①事業に関する政策的研究、②事業を通じた人材育成に関する研究に類型できることがわかる。言うまでもなく、このいずれの研究においても、人間の行為を考慮せずに実践問題を把握したり課題を解決したりすることはままならない。したがって、大学地域連携に関する研究においては、個人の行為に関する研究はもちろんのこと、マクロな政策研究においてさえも、潜在的な個々人の行為に対する意味や価値の観点からの洞察が必要不可欠となる。

ところで現在、初等・中等教育のみならず高等教育においても体験的あるいは経験的な学びが求められていることは周知の通りである。大学と地域の連携に基づいたさまざまな事業における学生の学びもこのひとつである。笹野・海津 (2022) によれば、「学び」には動詞的な意味合いの強い「活動としての学習」と名詞的な意味合いの強い「結果としての学習」のふたつの側面があるという。また、修飾語となる体験的、経験的の体験と経験であるが、主題への照準を保つためにここでは詳しく論じることはできないが、ここではひとまず「体験」を知覚、判断、気分、感情のような行為の実行にともなって生じるさまざまな「意識体験」とし、「経験」を偶然の体験のなかで、あるいは学習プロセスのなかでさまざまな行為を成功したり失敗したりすることを通じて獲得される潜在的な行為モデルとしておきたい。このように捉えると、「体験的・経験的な学び」とは、学びを「活動としての学習」として捉えた体験と経験の往還による学び手自身の主体的な学びと解する

ことができるであろう。

高等教育における体験的・経験的な学びについて中央教育審議会（2012）は、初等中等教育からの接続をふまえたうえで、「適格な判断力を発揮できるための教養，知識，経験を総合的に獲得する」ために、「主体的な学修の体験を重ね」て、「生涯学び続ける力を修得」することが求められるとしている。したがって、このような学びにおいては、事前事後の学習や体験内容のリフレクションによる共有により、自己の実存的な変容が促され、それを経験にすることによって学び手の成長が実現できることになる。

本稿の冒頭でみた学生たちのありふれた活動のなかには多くの意味や価値が内在している。大学地域連携の研究ではこの内在的意味や価値の構造と発生に関する研究が、先に述べた実践問題の把握や課題解決の方法論を明らかにしてくれるだろう。

2. 大学地域連携研究の人間学的方法

前節では大学地域連携研究における意味と価値の解明の重要性について述べてきた。本節ではこれを実現するための研究方法についてみていきたい。

先にも述べたように、大学地域連携に関する研究では、政策研究や学生の学びに関する調査研究などを中心に量的研究が行われてきた。しかし、この種の研究では個々人がその事業に何を、どのように体験し、学んできたかということが、つまり、ヒト、コト、モノの相互作用が浮き彫りにならず、その政策における「人間的なるもの」の影響を考量することができない。また、どのように人材育成をするかということを見通すことができない。このような問題に対して、たしかに体験に関するインタビューによる語りを中心とした質的研究もおこなわれているがここにも問題がないわけではない。

現象学的精神病理学者の木村敏（2014）は、近年、客観主義的な evidence based medicine に対するアンチテーゼとして登場した narrative based medicine のナラティブ（語り）について、その多くは客観的に確認できる患者の外的生活史の聴取

に終始しており、患者の自己形成に関わる内的生活史をかたちづくっている「筋立て」「プロット」を読み取ることに成功していないと指摘する。したがって、患者の自己を見抜くためには、患者の自己は対象的には見えてこないけれども、それ自身を示している現象をそのまま見えるようにする診療の際の現象学的な直観によるしかない結論づける。これはボイテンディクの主體としての自己運動が直観のうちに与えられるという自己運動の存在様式の解明と軌を一にしている。ここにおいてわれわれは、大学地域連携研究における人間の行為の直観的把握の妥当性に辿り着く。

以上のことから人間の行為を対象とした大学地域連携研究における人間学的方法は以下のような手順にまとめることができるであろう。

1. 人間の行為を機能としてとらえる立場を選択する。
2. 研究対象となる行為を直観によってその意味と価値を把握する。ただし、この直観される対象が発見しようとしている特徴的なものを現象のなかに多く含んでいるか否かについては十分な吟味が必要である（研究対象の適格性）。
3. 把握した内容について生命的想像力を用いて運動モルフォロジーの方法により追感を用いて分析することによってその行為（現象）の意味（本質，類型）と価値を同定する。
4. さらに、発生的分析を用いてこれらの意味や価値が発生してきた起源を解明する。その行為がどのような出来事（実的成素）によって発生してきたのかを現象学的な「解体」の方法を用いて明らかにする。
5. 2から4を他の事例などにあたるなどして分析結果の妥当性を高める。

以上のような作業によってはじめて人間の行為が解明されることになる。ここで留意しておかねばならないのは、このような人間学的分析は誰でもがどのような出来事を対象にしてもできるということではない、ということである。人間の行為の人間学的分析においては、分析者のそれまでの体験や経験及び省察力が求められることはいうまでもない。それによって分析内容のレベルが決定してしまう。確かにボイテンディクなどに代表さ

れる従来のユトレヒト学派の研究者たちの行う現象学的な記述が、解釈学的厳密さと芸術的感性をもつ一部の才能にあふれたエリートによってのみ可能であるような、訓練することのできない能力を必要とする学問的情況であることに異が唱えられ、エリートではない学者や初学者にも現象学的記述を可能とすること、いわゆる「民主化」が求められた(村井, 2012)ことは事実である。確かにこのような批判を免れないところはあるとしても、人間の行為の意味や価値の解明はポイテンディクが提唱する運動モルフォロジーによる機能分析による他ない。確かにポイテンディクは自身の研究方法について明確に示していない。これはポイテンディクの現象学的記述が彼の才能によるところが大きく、研究方法自体を明示する必要がなかったのかもしれない。あるいは現象学的分析は定式化できないという考え方によるものかもしれない。しかし今後この種の研究を集積するためには一定程度の明示化された研究方法論を用いて大学地域連携に関わる現象を解明することが求められるであろう。本研究の議論はその端緒になると言える。

IV. 残された課題

ここまでポイテンディク思想に基づいて、人間学的な大学地域連携研究の学的基盤について確認してきた。現在、産学連携や大学地域連携のような事業については、形式知と実践知の統合や文理融合といったことが提唱され、そこでは「総合知」の重要性が指摘されている。内閣府が『「総合知」の基本的な考え方及び戦略的に推進する方策 中間とりまとめ』(2023)に示しているように、多様な「知」が集い、新たな価値を創出する「知の活力」を生むことという意味での「総合知」の視点が重要となる。ポイテンディクにおいても「上位の研究法」の重要性として同様なことが指摘されていた(Buytendijk, 1956, S.30)。今後は大学地域連携研究のあり方について、「総合知」の再考を含め、「総合知」の観点から検討することが求められる。また、これに関連して日本学術会議は『新しい学術の体系—社会のための学術と文理の融合—』(2003)のなかで、これまでの「認識

科学」とは異なる「設計科学」という科学のあり方を提案している。この「設計科学」のあり方は大学地域連携研究の構造研究を進める上で極めて示唆的である。今後はこのふたつの課題について検討することが求められる。

謝辞

本研究は令和6年度日本大学学術研究助成金の助成を受けたものである。

文献

- バルザック著、山田登世子訳(1992),「歩き方の理論」,『風俗研究』,藤原書店, 79-146ページ。
- ポイテンディク, 大橋博司・斉藤正己訳(1977),『女性』, みすず書房。
- ポイテンディク, 濱中淑彦訳(1995),『人間と動物』, みすず書房, 73-74ページ。
- ポイテンディク著, 神谷美恵子訳(1966),「出会いの現象学」, みすず, 84。
- Buytendijk, F.J.J. (1956), *Allgemeine Theorie der Menschlichen Haltung und Bewegung*, Springer-Verlag.
- Buytendijk, F.J.J. (1957), "Das Menschliche der menschlichen Bewegung," *Der Nervenarzt*, H1,1-7.
- Buytendijk, F.J.J. (1958), *Zur Phänomenologie der Begegnung, Das Menschliche*, K.F. Keohler.
- Buytendijk, F.J.J. (1967), *Prolegomena einer anthropologischen Physiologie*, Otto Müller Salzburg.
- Christian, P. (1948), *Vom Wertbeftsein im Tun*, in; *Über die menschliche Bewegung als Einheit von Natur und Geist* Karl Hofmann 1963.
- 中央教育審議会(2012),「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」, https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_1.pdf (2024年3月7日 最終閲覧)
- フッサール著, 立松弘孝・榊原哲也訳(2009),『イデー II - ii』, みすず書房, 211-275ページ。
- シュトラッサー著, 徳永恂・加藤精司訳(1978),『人間科学の理念』, 新曜社, 179ページ。
- 金子晴勇(2022),『現代の哲学的人間学』, 知泉書館。
- 木村敏(2014),『あいだと生命』, 創元社, 49-73ページ。
- 加藤泰樹(1983),「ポイテンディクの主体概念について—機能運動学全体を規定している方法的基礎の解明—」,『体育・スポーツ哲学研究』, 第4巻, 59-60ページ。
- 村井尚子(2012)「[子どもという人間]への理解(2)—現象学的記述の分析—」『大阪樟蔭女子大学研究紀要』第2巻, 73-83ページ。

- 内閣府 (2023), 「『総合知』の基本的な考え方及び戦略的に推進する方策 中間とりまとめ」, <https://www8.cao.go.jp/cstp/sogochi/honbun1.pdf> (2024年3月21日最終閲覧)
- 中塚雅也・小田切徳美 (2016), 「大学地域連携の実態と課題」, 『農村計画学会誌』, Vol.35, No.1, 6-11ページ.
- 日本学術会議 (2003), 「新しい学術の体系ー社会のための学術と文理の融合ー」, <https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/18pdf/1829.pdf> (2024年3月21日最終閲覧)
- 笹野仁美・海津ゆりえ (2022) 「『体験的な学び』の変遷とその課題」, 教育研究紀要, 第31号, 95-107ページ.
- シュッツ著, 森川真規雄・浜日出夫訳 (1980), 『現象学的社会学』, 紀伊国屋書店.
- 山口一郎 (2002), 『現象学ことはじめ』, 日本評論社.
- 山川雄巳 (1983), 「政策研究の課題と方法」, 『年報政治学』, 第34号, 3-32ページ.
- ヴァイツゼッカー著, 木村敏・濱中淑彦訳 (1975), 『ゲシュタルトクライス』, みすず書房, 298ページ.